

古事記研究

西郷信綱

未來社刊

古事記研究

一九七三年七月一〇日 第一刷発行

定価 一、五〇〇円

◎著者 西郷 信綱

発行者 西谷 能雄

発行所 株式会社 未来社

東京都文京区小石川三の七の二

電話(八一四)五五二二代表

振替・東京八七三三五番

印刷 第一印刷

口絵 形成社

製本 今泉誠文社

乱丁・落丁本はおとりかえします。

古事記研究 西郷信綱

未来社刊

古事記研究
目次

稗田阿礼……………九

——古事記はいかにして成ったか——

- 一 稗田阿礼は男か女か (一六)
- 二 アメノウズメ (一四)
- 三 神々の笑い (二三)
- 四 伊勢神宮との関係 (二七)
- 五 シャーマンの世界 (三四)
- 六 「誦」とは何か (四一)
- 七 太安万侶について (四八)

近親相姦と神話……………五七

——イザナキ・イザナミのこと——

- 一 イザナキ・イザナミの物語 (五八)
- 二 妹・背(イモ・セ)の仲 (六三)
- 三 兄妹婚と創成神話 (六九)
- 四 神話と社会 (七五)

国譲り神話……………八一

- 一 神話と歴史 (八二)
- 二 国造と宮廷 (八四)
- 三 タケミナカタ、事代主 (八九)
- 四 国譲りの意味 (九五)

- 五 同族系譜を読む (二〇〇)
- 六 出雲と出雲国造 (二〇〇)
- 七 騎馬民族説について (二二)

大嘗祭の構造……………二二五

——日本古代王権の研究——

- 一 序 (二五)
- 二 即位と大嘗 (二九)
- 三 悠紀・主基 (三二)
- 四 聖なる稲 (三四)
- 五 罪と穢 (三七)
- 六 女の役割 (三二)
- 七 八百万の神 (三四)
- 八 天の羽衣 (三四)
- 九 嘗殿の秘儀 (四四)
- 十 鎮魂祭 (四五)
- 十一 隼人 (四五)
- 十二 語部 (五六)
- 十三 神器 (五六)
- 十四 天神の寿詞 (二六)
- 十五 饗宴 (二六)
- 十六 聖婚 (二七)

神武天皇……………一七五

- 一 方法について (七五)
- 二 神代から人代へ (七九)
- 三 神武東遷 (八三)
- 四 熊野 (九一)

- 五 大和平定の物語 (二卷) 六 久米歌 (二〇五)
- 七 即位 (二三四) 八 ハックニシラスメラミコト (三二〇)

ヤマトタケルの物語 三三九

- はしがき (三三〇) 一 兄をつかみ殺した話 (三三二)
- 二 クマソ征伐 (三三六) 三 ヤマトヒメのこと (三四〇)
- 四 オトタチバナヒメのこと (三五〇) 五 ミヤズヒメのこと (三五九)
- 六 思国歌 (二六五) 七 白鳥になった話 (二七四)

古事記研究史の反省 二八五

——一つの報告——

- あとがき 三〇四
- 索引 (巻末) 三〇五

古事記研究

稗田阿礼

——古事記はいかにして成ったか——

一 稗田阿礼は男か女か

「稗田阿礼を今頃まだ男か女かの点からきめて行くようでは、日本の史学も甚だ心細い繁栄だと言わなければならぬ」と柳田国男がいったのは昭和二年のことである。それ以後、かれこれ半世紀近くたつ。ところがまたぞろ私は、阿礼が男か女かを問おうとしている。というより問わざるをえないのだが、これは「日本の史学」がその後、「甚だ心細い繁栄」を続けているせいであろうか。あるいはそうかも知れぬが、しかし根本的には稗田阿礼が柳田国男の考えていたよりずっと不透明で難解な人物であるのにそれはもとづくと思う。現にいま読み返してみると彼の「稗田阿礼」という一文は、示唆深いものであることに変りはないけれど、さすがにやや鮮度が落ち、説得力を充分もっているとはもはやいいがたい節がある。

それはとにかく稗田阿礼を男と見るか女と見るかによって、古事記の理解のしかたにかなり重大なずれが生じ

るのは確かである。私がここに阿礼をとりあげるのも、古事記の読みと交叉する、そういう問題としてであつて、たんに好奇心をくすぐつたり、それに媚びたりするためではない。そして結論をさきにいえば、私は柳田国男とともに阿礼をやはり女と考える。それだけでなく、阿礼男性説——これにも後に見るように、種々色あいがあるけれど——に拠つて古事記を読むかぎり、その読みは肝心なところでの的が外れる仕儀になると考える。こういういささか脅迫めいて聞えるが、実は私は古事記の読みそのものからいつて阿礼が女、それも具体的には宮廷の巫女でなければならぬゆえんに説き及んでみたいのであり、その成りゆき上、阿礼男性説を素通りすることができぬまでの話である。まず、このことが従来どんなふうに論じられてきているか、ざつとふり返つておくのが順序だろう。

阿礼を女だと最初に断じたのは平田篤胤である。篤胤は平気で逸脱もやる代り、時々ハツと思わせるようなことをいう人である。問題になるのはいうまでもなく太安麻呂の書いた古事記の序の次の一節である。

時有^ニ舍人^一。姓稗田、名阿礼、年是廿八。為^レ人聰明、度^レ目誦^レ口、弘^レ耳勤^レ心。即、勅^ニ語阿礼^一、令^レ誦^ニ習^一帝皇日繼及先代旧辞^一。

(時ニ舍人有リ。姓ハ稗田、名ハ阿礼、年ハ是レ廿八。人ト為リ聰明ニシテ、目ニ度^フレバロニ誦ミ、耳ニ弘^クレバ心ニ勤^ムス。即チ、阿礼ニ勅語シテ帝皇日繼及ビ先代旧辞ヲ誦ミ習ハシム)。

これにつき篤胤はいう。後々必要な資料がふくまれていたので要点を抄出する。

「舍人は、刀禰と訓べし。稗田氏は、姓氏録に見えず。天武天皇紀に向^ニ乃^ク案^ニ至^ニ稗田^一と見えたり。然れば、大倭国の地名と聞えたり。彼地より出たる姓なるべし。〔師云、今添上郡に稗田村あり、是なるべし。〕さて弘仁私記序に、

天鈿女命後也と見え、西宮記裏書に、貢_ニ媛女_ニ事。延喜廿年十月十四日、昨尚侍_ニ令_レ奏、縫殿寮_ニ申、以_ニ禰田福貞子_ニ、請_レ為_ニ禰田海子_ニ死_レ關替_トとあり。此を合せて案_ニふに、阿礼は実に天_ニ受売命_ノの裔にて、女_ニ舍人_トなると思_レたり。……さて女_ニ刀禰_トならむには、命婦または宮人など書べきに舍人と書れば、なほ男_ニ刀禰_トなるべく思ふも有_レべけれど、稗田氏にて、宇受売の裔なれば、女と言ざらむも、女なること、其_レ世_ニには分明_キ事なれば、通_ニ用_ニふる_ニ字_ニを書_レるならむ。然るは、宇受売命の裔は、女の仕奉る例なればなり。名のさまも男とは聞_レえず_ト。阿礼を女と見ていい根拠は、これでほぼ出_レそろっている。ただ冒頭の「舍人は、刀禰と訓べし」というのは、やや武断に過ぎるであろう。延喜式(中務式)にも「宮人」を「比売刀禰」と訓むとあるから、猿女のぞくしていた縫殿寮(これは中務省の所管である)の女官(漢語でも宮人は女官を意味する)がヒメトネと呼ばれていたのは確かだが、さればといって舍人をトネと訓まねばならぬとは限らない。舍人はやはりトネリでいいと私は思う。もつとも、そこに阿礼男性説のつけこむ隙があるわけで、「舍人」という文字は中国でも日本でも女を指した例がなくすべて男を意味する、というのが即ちそのいいぶんである。しかしこれは、文脈ぬきに字面だけを追いすぎているとのそしりを免れまい。

周知のようにこの序は「邦家の経緯、王化の鴻基」つまり天皇による国政の根本を後の世に伝えようとする主旨のもので、序というよりは上表文の体裁をとっており、絢爛たる漢文で以て綴られている。そういう晴れがましい文脈中に「時_ニ有_ニ宮人_ト」などと果して書けるものだろうか。女を意味する宮人という一語をこの文中に挿入するならば、一滴の油が水面に落ちた恰好になること必定である。まして「時_ニ有_ニ猿女_ト」とあるがままに書ける道理がない。それはもう完全なぶちこわしで、つまり「宮人」も「猿女」もこの上表文の語彙としてふさわしく

ないということになる。天照大神の天の岩屋戸ごもりとスサノヲとの誓いの話を「懸鏡吐珠」と表現し、葦原中国平定のことを「論小浜而清国土」と片づけている。この安万侶の文体のもつ儀式性を念頭において「時有人」を読まねばならぬ。そういう角度から眺めるならば、「舍人」という語の蔽いの下から巫女としての、猿女としての稗田阿礼の姿がおのずと立ちあらわれて来ないだろうか。

宣長は、「此序は、本文とはいたく異にして、すべて漢籍の趣を以て其文章をいみじくかざりて書り、いかなれば然るぞといふに、凡て書を著りて上に献る序は、然文をかざり当代を賛称奉りなどする、漢のおしなべての例なるに依れるなり、……如此きことどもいはでは、文章みだてなきが故なり、抑此序にかかる語どものあるを見て、ゆくりなく本文の旨を莫誤りそ」(古事記伝)といっている。私はこの序の重要さを認めるにやぶさかでないが、少くとも序の方から本文を読むのではなく、本文に照らして序を読むべきである。従来はともすれば、序のことばが本文との構造的な連関なしにそれじたいとして抽象的に詮議されすぎているように見うけられる。だから阿礼を女性と見なしさえすれば片づくといった問題でこれがないことも明白である。篤胤は阿礼女性説をとなえはしたけれど、古事記本文の読みにそれを生かした気配がほとんどないのにひきかえ、宣長は阿礼を稗田老翁としたにかかわらずその読みは非常にすぐれている。

阿礼が女かどうかが決める手ではなく、問題はもっと深いところにあることがわかる。それに阿礼男性説といっても、前言ったように一色でない。そのなかでいちばん始末が悪い——そう私が思う——のは、そして今なお根づよいのは、阿礼を学者に見たて、序に帝皇日継(帝紀)と先代旧辞を「誦習」したとあるのはつまりそれを訓読したのだと考える説である。やや古いけれどその代表として、問題点をあらわにうち出している高木敏雄の

説を左にあげておく。

「阿礼と云う者は学者であつて、古い本であるとか、新しい本でも当時の漢文或は漢文と日本文と折衷したような難しい文章でも能く読んで、そうして此漢字は是は音で読むとか、是は訓で読むとか云うことを能く覚えて居つた人間であつたから、其事に携つたのであらうと思う。唯だ普通の説のように昔のことを、其当時は書物が無かつたから古代の習慣に従つてそれを暗記して、何十年の間古い伝説を伝えて来たのだ、と見るのも一理あるようだけれども、何うも其当事に於てはそんな必要はなかつた筈である。其当事に於ては、方々に記録もあれば、又皇室には記録の官吏があつたのでありますから、其官吏にやらして差支えない。何を苦んで紙もあれば筆もあり、或は特に其記録を読む所の学者もある時代に於て、特別に暗誦者を求むる必要がありましよう⁽³⁾」。

国学の系統を引く学者のあいだで素朴な暗記説が信じられていたのにたいし、これが一つの有力な反措定であつたことはいうまでもない。宣長なども稗田老翁と見ていること前述のとおりだが、やはり暗記説であつた。かくして阿礼を女と見るか男と見るかという視点に、暗記か訓読かという問題が交叉し、事態はなかなかこみいてくるわけだが、大ざっぱには、暗記説は女としての、訓読説は男としての阿礼をそれぞれ志向しているとほば類別できる。そして今日では訓読説の方が遙かに優勢である。確かに高木敏雄の指摘するように、すでに「記録」もありそれを読む「学者」もいる時世にわざわざ「暗誦者」を求めらるゝ必要があるかといふのは、国学者風の素朴な暗記説への有効な批判であり、この点を無視して阿礼を論ずることはもはや許されない。記紀研究に一期を劃したと称される津田左右吉なども、もとより訓読派にぞくする。というより訓読説は彼によって

堅められ仕上げられたと見るべきであらう。

だが訓読説が果してそうすんなりと成りたつかどうか、そこではある重要なことからへの考慮がこぼれ落ちて
いるのではないかと私は疑う。柳田国男が右の一文で「日本の史学」を「甚だ心細い繁榮」と評したときも、そ
れと名ざしてこそいいが紛れもなく津田左右吉の記紀研究を念頭においていたはずである。

(1) 「稗田阿礼」(『妹の力』所収)。

(2) 『古史徵開題記』。

(3) 『日本神話伝説の研究』。ただし、倉野憲司『古事記序文注釈』による。この本は古事記序にかんするもっとも包
括的な注釈であり、私もその恩恵に浴したことをいっておきたい。

一一 アメノウズメ

男性Ⅱ訓読説に釘をさし、阿礼が宮廷の巫女であるゆえんをあらたに説こうとしたのが、最初にあげた柳田国
男の「稗田阿礼」だが、この論の功績は、序の文を古事記の内容と関連させて阿礼女性説をうち出した点にある。

「古事記は其体裁や資料の選択から、寧ろ伝誦者の聡慧なる一女性であったことを推測せしめるものがある
のである。例えば美しい歌物語が多く、歌や諺の由来談を中心にして、屢々公私の些事が記憶せられ、政治の
推移を促したような大事件が、却って折々は閑却せられ、……言わば史実としてよりも、心を動かすべき
物語として、久しく昔を愛する者の間に相統せられて居た事情を考えさせられる」。